岸本美緒著
清代中國の物價と經濟變動

足立啓二

「世界史の基本法則」という戰後歷史學の理論的枠組みが、中國史研究に存在していた。それが如何なる理論であったのか。その把えかた自身が、その理論への對應と關わっていた。實證を通じて具體化を圖るべき理論であるのか、時期區分論の誤った適用であるのか、ヨーロッパモデルの單系發展理論であるのか、固定的な直線的發展圖式であるのか。いずれにせよ多くの研究は、大なり小なりその克服を目指すものであり、その理論との位置關係で自己の方法を認識してきた。

近年、かつての出發點が殆ど意識されなくなるにつれて、克服の過程そのものが存在感を失いつつあるように見える。これは一面では研究の具體的豐富化であるとともに、他面では體系ないしは方法への關心の低下である。しかし自覺の如何にかかわらず全ての研究が固有の方法をもっている以上、新しい方法が實り多いものになるためにも、實證が體系を作り出すためにも、方法ないし枠組みへの自覺が必要なことは言うまでもない。

本書の著者の岸本氏が、戰後歷史學の枠組みを克服することを、方法的にも最も自覺的なかたちで進めてこられた研究者の一人であり、研究の視角と手法において新しい研究動向を開拓してこられたことは、廣く認められるところであろう。

本書は氏の諸業績の內で、經濟過程に關する論考をまとめたものである。本書によって一連の業績の到達點とともに、氏の經濟史における方法が一覽できるようになった。先のような研究狀況に鑑みても、喜ばしいことと言えよう。

全體の序においては、經濟史における氏の方法が簡潔に示される。經濟現象を人々の行爲の集合的結果としてとらえ、その動機と意圖とを分析することが提起される。具體的には、非可逆的な發展段階としてではなく、さまざまな經濟環境への人々の對應を通じて清代中國經濟を分析すること、小農經濟メカニズムや市場の性格など人々の行動を規定する經濟の型を明らかにすること、こうした經濟の型に對して人々が作り上げた經濟觀を分析することが課題として揭げられる。

これらの課題に從い、以下のような五つの篇だてに研究成果が整理される。第一篇では、研究史の整理と問題關心と方法の提示が、第二篇では、經濟環境の長期變動に關する諸論文が、第三篇では、長期變動として區分されるそれぞれの經濟局面における經濟環境・經濟行動・經濟思想の分析が、第四篇では、『恆產瑣言』と『租覈』という二つの著作を通じた前記問題の分析が、第五篇では、物價を中心とする經濟環境に關わる文書の史料的檢證と分析がなされる。各章ともに、原論文の形を基本的に殘しながら、現段階での見解は、注釋の補強と幾つかの章の末尾に附された補論の形でしめされ、原論文の體裁を殘しつつ、全體の統一性が明示されるよう、かつ著者自身の認識の發展が示されるように配慮されている。以下では先ず、補論も含めて一九に及ぶ各章を、概略紹介する。

第一篇　第一章、「清代物價史研究の現狀」

清代物價史に關わる諸研究を整理する形で、物價史研究の對象の廣がりと方法とが論じられる。清代物價資料の諸ジャンルとそれらを用いた研究が紹介された後、物價の長期動向を分析・評價する枠組みとしての價値法則論・貨幣數量説にかわり、諸要因の相互規定關係をふまえた經濟變動論が提示される。また、非可逆的な發展を前提とし、外在的要因をそれに對する阻害物とみる立場に對し、經濟行動を外部條件への對應としてとらえる變動論的立場が對比され、このような視點から、物價を規定する市場の構造的問題として國際間・遠隔地間分業と局地的分業の問題、小農經濟の行動樣式と市場といった問題が示される。

補論1、「近十年來の清代物價史研究」

舊稿以降の研究の進展が、資料整理の進行と市場統合の問題を中心に纏められる。

第二章、「モラル・エコノミー論と中國社會研究」

モラルエコノミー論という表題のもとに論じられている諸問題、具體的には、小農の生存維持經濟、經濟における倫理と宗教、規範の成り立つ場の構造といった問題を、中國史研究がどの樣に扱ってきたかについての論評である。論點は多岐にわたり、紹介は容易ではないが、人々の行動を規定する經濟的・倫理的・社會的關係に注目する研究を、「內面的理解」の傳統としてとらえ、總じてそれらの注目する固定的な秩序のない競爭的な中國社會が、同じく小農經濟を基礎としつつも、西歐のモラルエコノミー論者の前提とする社會とは異なる個性を持っていたことが示される。

第二篇　第三章、「清代前期江南の米價動向」

米價に關わる諸資料の性格についての檢討をふまえ、私的な觀察を中心とする多數の數値資料を總合するとともに、それらを米價變動に關する當時の人々の實感的記述に照らし合わせることによって、江南の米價の長期的な値動きが跡づけられる。萬曆末に起源をもつ順治期の高米價、順治末の急落に續く康熙時代の低迷、乾隆初期の急騰と二〇年代以降の漸騰という、米價變動の大勢が明らかにされる。

第四章、「清代前期江南の物價動向」

第三章の米價に續き、同時期の他の諸物價の動向が、同樣な手法でもって實證される。棉花・生糸・棉布・田產・賃金について、それぞれに利用可能な史料範圍で値動きが跡づけられ、大勢としては米價と似通った變動が確認されるとともに、賦役負擔の動向と田產、米などの主穀騰貴がもたらす棉布等の需要縮小など、商品ごとの特性についても、必要な指摘が行われる。

第五章、「清代前期の國際貿易と經濟變動」

以上の物價の長期變動を規定したと考えられる要因のうちで、筆者がとくに重視する國際貿易の動向を、內外の先行研究のきわめて網羅的な整理を通じて復元したものである。復元された國際貿易の盛衰のリズムが、國內經濟の諸現象と如何に整合するかが時代を追って示される。明末における大量の銀流入と、國家財政を通じた北邊への流出と都市上層への環流、農村の貧困と都市の繁榮。明末における富の偏在を基礎とする地方の半自立的勢力の形成、それを封じ込めるために行われた清代初期の海禁がもたらした物價の急落と連鎖的困窮。一六八四年の海禁解除以降の安定。乾隆一〇～二〇年

代に始まる國際貿易の活性化と農村を中心とする活況。こうした時代性をもった諸局面についての見取り圖が提示されるとともに、海外貿易と連動する經濟の背景として、開放的で地域連結的な市場の問題が提示される。

第三篇　第六章、「明末の田土市場に關する一考察」

主要には同時代人の認識を記した記述資料によりながら、明代の田土市場の動向を跡づける。正德の頃から賦役負擔の增大によって低下した田價が、隆慶・萬曆初期以來上昇に轉ずるが、農村部では依然として農產物價格は低迷していたこと、その背景には國際貿易を通じて流入した銀が、國家財政を通じて北邊に流出し、都市部に環流していたという事實の存在することが推定され、第五章の立論の基礎の一部となっている。

第七章、「康熙年間の穀賤について」

三・四章で明らかにされた康熙年間の不況的現象について、同時代人がいかに認識していたかの分析から、當時の經濟體制の特質が歸納される。物價下落期である康熙初期は、國際貿易の收縮と戶部銀庫への蓄積を通じて、民間における銀流通の減少していく時期であることが指摘され、この時期、全般的な物價下落と市場の收縮をふまえて、さまざまな貨幣供給議論がなされることを示す。家計維持目的の商品生產は物價低落局面で供給を增加させるため、內的に需給均衡の機能の働かない不安定な經濟體制のもとで、國內市場にたいし海外需要や國家財政等の外部的需要が重要性をもったこと、開放的・非完結的な構造の市場において強い效果を發揮する地域外需用を表現するものとして、市場間交易を媒介とする銀が認識されたことを、康熙不況における有效需要を貨幣と同一視する議論の前提として認める。

第八章、「清朝中期經濟政策の基調」

一七四〇年代における長期的構造的な米價の上昇に直面して、階層間利害・地域間利害といったディレンマの中で、清朝が採用した經濟政策の特質が分析される。遏糴・採買・積儲・蠲免・減租といった內的に對立を含む諸政策は、その決定において一貫性を缺いており、狀況に應じて最も實效を得ることが判斷原則であり、中央の決定もガイドラインにすぎず、條例や會典も試行錯誤の軌跡であるとする。

第九章、「清代の『七折錢』慣行について」

銅錢でありながら兩・錢といった銀の重量單位で表示する貨幣慣行についての、江南の「七折錢」を中心とした研究である。一兩七〇〇文という相場が續いた後に、銀使用から錢使用へと轉換したために生まれた慣行と理解され、こうした慣習が江南デルタ北部・東部を中心とした地域に廣がっており、不動產賣買を中心として何がしかの通時的に固定的な性格をもった用途に使われていたことが示される。

補論2、「清代の不動產賣買における貨幣使用」

計數單位表示方法における貨幣種類の變遷が、不動產賣買契約文書の統計的分析によって、蘇州・北京・山東・徽州・福建について、一覽可能に整理され、大きな方向として、銅錢ないし銀元といった計數貨幣の使用の增加が見られるとしても、それが必ずしも單純で均質的な安定した貨幣制度の全國的な成立には結びついていないことが指摘される。

第四篇　第十章、「『恒産瑣言』について」

『恒産瑣言』の著者張英の土地集積と經營を復元するとともに、同書が商業資本の本格的侵入や抗租風潮にみまわれない農村における安定した經濟生活を背景に、鄉居生活をすすめるものであったことを論じる。

補論3、「明末清初における土地集積の動向――『城居地主』の問題をめぐって――」

第二篇・第三篇の諸論攷の成果をふまえて、城居と鄉居の問題がとらえ直される。明末における城居の盛行は、當時の軍事・財政構造が生み出した都市上層への資金集中の結果として理解され、他方、清代前期における張英のごとき鄉居のすすめは、土地所有の安定の故ではなく、農產物市場の危機的收縮のもとにおける商品經濟からの撤退の主張として理解され、乾隆期は明末とは逆に農村部に資金と土地所有が流れ込む時期として評價される。

第十一章、「『租覈』の土地所有論」

ユニークな減租論で著名な陶煦の『租覈』の理論的特質の分析がなされる。土地の王有論と私有論は、土地私有の事實と大土地所有の弊害とを前に、いずれも社會の安寧維持のために主張される一種のレトリックとして存在するが故に、清代土地所有論にしばしば併存するものであること、家計維持のための小農的合理性が高い田面價格を生み出しており、共同出資的共有關係との類比で一田兩主制を理解しようという理論には破綻があることなどが導かれる。

第十二章、「『租覈』市場論の經濟思想史的位置」

商工業部門への需要形成の觀點から減租の效用を論じる陶煦の市場論が、光緒の不況に際し、購買力擴大を海外貿易や國家財政などに求める改良派の議論を逆轉し、減租の論據を求めて富者と區別される農民の消費を購買力の源として位置づけるなかで發見されたものであることを解明する。

補論4、「明末清初の農本思想」

經濟諸部門間の市場を通じた連關に注目する陶煦との關わりで、傳統的な農本思想の構造を解明した補論である。勤勞農民からの收奪と、收奪階層の奢侈的消費に依存する商工業という、垂直的な經濟構造の實在を基礎として、解釋裝置としての農本モデルが存在しており、農本論も工商本業論も、貧富の差の擴大を批判する上での、文脈依存的な議論であることが明示される。

第五篇　第十三章、「清代戶部銀庫黃冊について」

清朝中央における財政ストックの中核であった戶部銀庫の動態を示す黃冊の資料的價値を檢證するとともに、內閣大庫をへて現在第一歷史檔案館を中心に保存されている黃冊の原文書に分析を加えることにより、戶部銀庫の收入とストックの枠組みが示される。時代とともに戶部銀庫收入の絕對額が減少するとともに、地丁の構成比が急減するなどの特徵が指摘される。

第十四章、「清末江蘇省太湖廳の晴雨糧價報告について」

督撫や布政使司による穀物價格報告書である「糧價清單」「糧價細冊」作成のための州縣による報告書作成過程を示す、國會圖書館所藏の太湖廳文書の紹介と分析である。報告書作成のための草稿と、報告書の樣式に關する上級官廳からの指示文書の文書的檢討を通じて、清末における糧價報告作業の事例が復元される。

第十五章、「國立國會圖書館藏『河南錢糧冊』について」

國會圖書館に所藏される清朝最末期における河南省からの財政報

告書一〇七二冊について、その構成と内容上の特徴を明らかにする。總括報告書である「丁地省總清册」と「春秋撥册」を基軸に、各種報告書の位置づけが示され、清末に新たに形成されてきた財政項目について充分反映してはいないものの、奏銷制度がかなりの程度、規定に從って運用され、財政を反映していたことが明らかにされる。

以上、豐富な論旨の概略のみを紹介してきた。一讀して感心させられるのは、本書の論述が廣範な資料と研究論文、とりわけ内外の諸研究への網羅的な目配りのもとに進められている點である。中國・アメリカにおける近年の研究の進展の結果、厖大化した先行研究を消化することそのものが既に困難な作業になりつつあるが、本書はそれらを廣く基礎にして研究が始められており、敬服のかぎりである。この周到な目配りに裏附けられて、大膽な假説は假説として提示しつつも、事實認識における論旨の展開は、愼重で無理の少ないものとなっている。

最初に紹介したように、岸本氏の業績は、經濟現象を人々の行爲の集合的結果としてとらえ、その動機と意圖とを分析するという方法をつうじて、固定的で非可逆的な發展段階論にかわる、諸事象の相互關係を重視した「變動分析的」な經濟史理解を示すものであるといえよう。この方法は第一篇で明示的に示されるとともに、各章の實證で生かされているが、とりわけ經濟認識に關する記述史料の扱いにおいて、その力を發揮しているように思われる。

資料分析はつねに認識する側の視點に立った資料理解ではあるが、發展段階理論はとりわけ既成の理論的枠組みの尺度で資料を評價しがちであった。大衆的市場論、農本主義、土地王有論などといった諸議論の分析において、岸本氏は、ヨーロッパや日本流の社會認識の理論枠組みから自覺的に自由である。史料の語る經濟認識は、類型化された表現も含めて、それが主張される具體的脈絡の中で位置づけられ、論理の成立する背景の中で論理が理解される。中國の學術ないし傳統的認識論は、對稱そのものの理論的構造性を分析するよりは、便宜ないしは實用に從って議論を組み立てるという性格を強く持ってきたと思われるが、こういった對象を分析する際には、氏の方法はとりわけ力を發揮する。個別には矛盾する論點や對立する政策の實用主義的に併存する構成が、柔軟に、個々の意味關連の中に位置づけを與えられ、解き明かされることになる。

本書の實證的中心をなす物價史研究の面では、資料操作という意味での狹義の方法についてみると、一方で數値的な物價資料を整理しつつ、それらを一定の主觀性を持った個人的認識の記述と結びつけることによって、物價動向把握そのものの確定性を高めるとともに、物價變動を諸現象の連關の中でとらえるという、中國物價史にとっての相對的に安定した手法が、成果を收めているといえる。數値資料の統計的處理だけに賴った研究が、マクロな動向を知る上では意義を持つものの、行政的な資料の場合には數値の持つ信賴度の低さによって、雜多な資料からの總合である場合にはサンプルのもつ社會的脈絡や地域性の面での一貫性の乏しさによって、多くがモデルを提示するといった限界を持たざるを得なかったのに比べて、手法上の新しい充實であるといえよう。

こうした手法に依りながら、本書諸論文を通じて、明代後期から清末に至る諸物價の動向の長期的トレンドが整備され、異なる經濟

局面を特徴づける變化點の幾つかが特定された。その上に立って、物價の變動として表現される經濟變動が、國際貿易と國家財政によって作り出される貨幣需給、もしくはそれと表裏の關係をなす物資の需給と、密接な關連を有することが、高い蓋然性でもって示された。從來から個別に注目されてきた部分もあるが、このことの全面的展開が、本書の實證的な功績の内の最大のものであろう。

季節性をもった短期變動や、農産物の作柄等を原因とする短期變動とはことなる、物價の長期的動態は、これまで貨幣數量説ないしは勞働價値説を基礎に説明されてきたが、かなりに急激な變化點をへて大幅な變動を示す物價を、それらの理論では少なくとも全面的には説明できなかった。國際貿易と國家財政という市場にとっては外在的な因子の規定性を認めた上で、それらが生み出す需要供給關係という諸要因間の相互規定關係を視野に入れた本書の分析によって、清代經濟史の理解の範圍は廣げられた。

清代中國において、國際貿易の國民純收入に對する割合は、氏も指摘されるように一・五パーセント程度という國際的に見ても低い水準にある。國家財政の規模も、清代の後期をとるならば、國際貿易の比重と甚だしくは違わないと考えられる。それにもかかわらず貿易と國家財政がもつと想定される國内經濟に對する強い影響力の根據を、氏は、中國の經濟の持つ市場の開放性、ないしは開放的な市場の連結構造と、家計維持を旨とする小農經濟というもののもつ固有の特性とにもとめる。開放的市場構造と小農經濟が、國際經濟をはじめとする外部要因に過敏な反應を示すであろうという指摘は、論理的に理解することが出來る。

しかしこれらの性格規定は、事態を説明する上で、未だなお一般的ではなかろうか。開放的な市場の連結構造と對比される局地的市場圈ないしは地域内分業構造は、モデルとしてはともかく、現實には存在しないと考えられる。それは「發展段階論」の作り出した戯畫ではなかったろうか。家計維持を基準として行動する小農經濟は、大經營が支配的となる歴史段階に先行し、世界史的にみて普遍的な現象であったはずである。氏によって解明された經濟變動が、具體的な經濟行動を通じて完結的に理解されるためには、さらに對象の性格の具體化が必要とされよう。

小農的普遍性を基礎としつつ、中國の秩序構造がモラルエコノミー論の前提とするヨーロッパ社會のそれと對照的に異なることは、氏も第二章で指摘されるところである。經濟現象を人々の行爲の集合的結果としてとらえ、その動機と意圖とを分析するという本書で成果を收めている氏の方法が、「經濟行動の型」ないしは「經濟の型」を分析するという氏の課題の一つにどのように生かされるのか、興味深い。對象を分析するに際して、諸事象・諸行爲の間の關係を意味づけていくという立場と、對象自身に構造性を認める立場には、認識論的にも些か相違があると考えられ、氏自身もその相違を肯定的に位置づけておられると考えるからである。

物價というマクロな現象を分析對象とする本書の實證からすると、市場構造と小農經濟の問題は周邊的な課題であるのかもしれない。本書が、實證的成果とともに、方法の提起の上で持つ大きな位置づけの故に、贅言した次第である。

一九九七年一月　東京　研文出版
A五判　五四〇＋Ⅵ頁　九五〇〇圓